慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 月の引力と人体の関係並に七の数に就て |
| Sub Title | |
| Author | 清水, 静文 |
| Publisher | 三田学会 |
| Publication year | 1909 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.2 (1909. 3) ,p.251(117)- 253(119) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090301-0117 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

夫れ豫算に關する所謂學問的議論の如きは之を西洋の著書に就て見れば材料豐富にして苟も外國語を解する者は故らに日本語にて此の如き書あることを希望せざる可し然れども吾人の渴望せる所は日本語にて日本の財政事情を詳解せる著書の出でんことなり而して武富氏の著の如きは最もよく此要求に適するものと云ふ可し而して紙數も殆ど六百頁に上り解釋頗る詳密にして特に國表に頁を加へて了解に便にせり故に余輩は近來の好著として之を歡迎するに躊躇せざるなり。

## 慶應義塾大學部教授　堀江一著
## 最新銀行論　第六版

堀江氏の銀行論は第一版を卅七年に發行し爾來著書の多忙なりし爲め改版の運に至らざりしが本年六月第六版を發行するに當たり大に增補訂正を加へたり。

著者は中央銀行を中心として立論するの方法を採り先づ第一に銀行に關する重要觀念を說き次に銀行業務を詳說し然る後米英獨佛の中央銀行に關する說明を加へたり尙ほ進んで銀行の資本金積立金並に組織及び銀行の監督檢査を說き次には我國の銀行制度に付て詳細の說明を試みたり而して後金融の特殊機關として勸業銀行動產銀行興業銀行貯蓄銀行信托會社等の說明を加へ最後に外國爲替及び恐慌の說明を附加せり。

本書第六版は五百頁弱にして著者は其編纂に當り常に之を敎科書となすことを眼中に置きしかば紙數も前版に比して多く增加せず又參考書の如きも學生の實際通讀す可き底のもののみを揭げたり而して第六版が舊版と異る所は恐慌の實例を削除し又最近出版の洋書類を參照して所謂 up to date となせるにあり而して此書の價値の如きは世既に定評あるが故に玆に之を述ぶるの要を見ず故に此の如きは唯に好良の敎科書として學生の必携に價するのみならず又實際家の如きも之によりて値に得る所ある可きを信ずるなり。



# 雜錄

## 月の引力と人體の關係
## 竝に七の數に就て

清水靜文

吾々人間は、此五尺の體軀を生理的に、解剖的に、將た心理的に、解釋した丈では、充分分かるものでない。天外幾億萬里の外にある、日月星辰の及ぼす熱、光線、引力等一切の影響をも、數的に、量的に明めねばならぬ。此等の關係迄が、悉く知れた曉でなければ、人間なるものゝ解釋が出來たとは云へぬ。潮汐の干滿が大陰と大陽の引力より起ることは、今更言ふ迄もない。大地震及火山の大噴火が、月の引力の最も强い時、卽ち大陰曆の朔日か十五日に起ることの多いのも、其筋の學者の稱へてをるところである。斯くの如く偉大なる影響を地球上に及ぼす大陰が、人體に何等の關係もないとは何としても考へられぬ。地球の電氣は僅か三寸か五寸の鐵の棒に感應して磁石力を生ずるではないか。五尺の人體に月の引力が變化を起さしむると云ふても、强ち空言漫語ではあるまい。上げ潮の時に怪我をすれば、血液が多く出るとは、昔から言ひ傳へてをる。殊に婦人の血行を支配してをるのが、月であることは事實である。男性よりも特に女性を多く支配するのは、何故であるかと云ふに、女子には兒を產むと云ふ生理的大變動がある。身體內に大變動のある時は外部よりの刺劇を感ずることが一層甚しい。草立、草枯に病氣が起ることの多いのも此爲である。月が地球を離れてから五千四百萬年、生物の發顯してから凡そ四千八百萬年、月は此長年月の間、常に生物に引力作用を及ぼして、血行に抑揚を生じ、其影響は遺傳となり、習慣となり、天性に變じたのであらうと考へられる。月が潮汐の干滿に關係あるが如く、血液の循環に關係あるものとすれば、血液は營養作用を掌つてをるから、體質に其作用

を及ぼすことの推測も出來る。併し是を述るに付ては、七と云ふ數に付て少々研究する必要がある。七の數は人類開闢の始より、一種不思議な數と考へられてをる。創世紀にも地球は七日で出來たと云ひ、佛の供養をするにも、七日々々が命日になつてをる。藥も一週り卽ち七日飲まねば效驗が分らぬと云ふが、深く考へて見れば、此一週日も矢張り月の引力に關係がある。何故かと云へば朔日と十五日が大潮で、其中間が小潮である。丁度一ケ月の間に、二回高くなつて二回低くなる。卽ち上がり下がり、上がり下がりで、月の引力の抑揚增減の向が四回程變化する勘定になる。大陰曆の一ケ月は二十九日許であるから、之を四分すれば略ぼ七日となる。故に引力の働き具合が七日々々に向を變へる、其隋性が幾千萬年の間人體に作用して、七の數と人體とは離るべからざる關係を持つ樣になつたものと考へられる。人によつて相違はあるが、生理學者の云ふところによれば、體質は大抵六七年目毎に一變する。俚語にも七つ迄は神の位と云ふが、七歲は赤坊と子供の分れ目で、着物の附紐を解いて帶と取替へる祝をする。其倍數十四歲は生理學上子供が靑年と成る時期で、音聲の變化すると共に、身體內に激變が起るから、病氣に罹り易い。從て其年齡近くの內では、一番死亡率が多い。それから二十一歲は丁年で、身體の發達が略ぼ定まり、六七四十二歲は俗に所謂厄年である。四十二歲以後は、體質が次第々々に消耗するのである。四十二を厄年と云ふは、四二卽ち死と音が通じてをるから、不吉である、故に厄年にしてをるけれども、老衰期に向ふところであるから、實際體質にも大變化が起るのは當然である。七七四十九歲は存命男女の數が等しき歲——生れるのは女百人について、男百四人計なれど、男の方が若死する——にして、七九六十三は六十一の還曆に近い歲であるが、體質上から云へば、六十三が眞の還曆であらう。二十一迄は上り坂、それより四十二迄は平坦にして、以下六十三迄は下り坂、七十で古稀の賀をする。以上述べ來た樣





な事から、七と云ふ數は一種不可思議なものである、神秘的のものであると云ふ考が起つたのであらう。七堂伽藍、七寶、七條の袈裟、七福神、七社、七情、七草等より、七度生れて賊を討つなどの誓言、七幾七道の別ち方に至る迄、七の數に緣故がある。是は月の引力が人間を通じて顯はれたのであるが、自然界に於ける光線の組成色と、原子の週期率までが、共に七であるに至ては、益〻驚かざるを得ない。併し之は月とは何等の關係もない。

# 千九百七年の恐慌（パニック）を論ず

丸山訓造

## 緖論

今や吾人は千九百七年米國恐慌の成行の一般を談り而して其に依りて惹起されたる特質を考究するに充分なる時期に到達せるを知る。實に千九百七年の恐慌は種々なる點に於て以前米國に起れる數度の恐慌と相似せる所多けれとも其激烈の度强く、全國に亙りて信用機關は破壞され全然同時に銀行の支拂停止、破產者の續出を見たるが如きは合衆國々立銀行制度の創立以來未だ曾て見ざるの事例に屬せり。

邦語にては一般に Crisis も panic も共に恐慌と一言に之を譯して敢て區別する者少なく從つて混用さる、ことの多く又人に依り其所見を異にするが故に玆に本論に入るに先だち聊か兩者の意義を明かにするの要あるべし。

クラキシスは商業界繁榮の變轉期（タアーニングポイント）にして其後に整理時代卽沈滯期を伴ふものなり、此沈滯期にありては物價は一般に低落して商工業は振はず、蓋しかくの如きは資本的生產に於ける必然的に生する缺點たり、パニックは一國信用制度の一時的瓦解にして信用が依つて以て成立する一般の信念破壞の爲に惹起され得るなり、而して恐慌に關して學者の下せる定義を見るに、バアートン氏はクラキシスを以て「事業界に於ける急性的の擾亂の